

# 十月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

真白きあさがほ

木 畑 紀 子 京 都

鳥たちのこゑが四方よりきこえてきて長雨止むを知らせくられたり  
旅つばめ定住すずめそれぞれのいのちを生きたるこゑ交じりあふ  
生きるとは苛酷なること巢落ち子のつばめ仲間はずれのすずめ  
つゆばれにひらく真白きあさがほは黒蟻いくつのせてほほゑむ  
あとすこし生きて励まなしづかなる炎をあぐる夏野のカンナ

銀の時計

鈴 木 竹 志 愛 知

名古屋駅銀の時計にわれを待つ老人たちはかつての学友  
学友に久方ぶりに会ひたればみな真正銘の老人となる  
大学を出でて早くも五十年経つてしまつた見事な老人  
それぞれにメットを被り東京のデモに参加をしたる面々  
簡単に人は変はらぬ時経てば学生時代の丁々発止

うつ伏せ

水 上 芙 季 神奈川

大抵のことは再起動で解決す朝も月曜も眩しいけれど  
テレビではなくてラジオの気分です食卓にかすみ草を飾つて  
「シュツ」「ファー」と言つてわれは風呂に子を入れて完全にサンシャイン池崎  
結婚をしない世界線もあつたこと酔ふと夫は何回も言ふ  
懐かしい人と話した夜はうつ伏せで寝るんだ地球を抱いて

水の影

斉 藤 梢 宮 城

蹲ひの水には水の影ひそみ夏はいよいよ夏らしくなる  
素水といふ言葉を胸にひびかせて夏陽のあたる坂道のぼる  
今日も来る母の手紙の「お願ひ」に買ひては送る夏の日常  
窓の外（楽天花火）の音のして闇が弾ける夜となりたり  
ベランダの小さな花に水をやる夫を見てをり還暦の夫を

☆

☆



水鳥晴子 兵庫

考へる力をうばふほど柔く甘いケーキををりをり食べる  
くろきまで葉のいろ深む木々の風ひたひに受けてしばらく行けり  
紺ふかき切りガラスの灰皿を購めて母よ何おもひけむ  
見捨てられはたや見捨てて航く舟の補陀落渡海 歌を詠みつぐ  
写真とはまるで別人 おもひきりふとりし歌手がうたひ始めつ

高野 公彦 千葉

一つ死も二十万余の死も哀し妻の忌日は沖繩慰霊の日  
三代を跨いで生きてわが老いは当然の罰、あるいは褒美か  
ユーミンの唄ふ「ノーサイド」聴きながらまた涙ぐむ俺でない俺  
危いよ小道の犬よ自転車のふらふら乗りの高野老が来た  
昼ぞらに女櫛のやうな白い月浮かぶを見つうつとせり

奥村 晃 作\* 東京

『ただごと歌百十首』読む少しずつ机辺に置いて少しずつ読む  
激ち・一・イデア志向を繰り返して説けり今井は作品評で  
百十のどれもそれぞれ完結の鋭く深く面白い本  
豊かなる教養基盤持つ人のそれを生かした本面白い  
いいものはいいものだからおのずから世間は容れて行くであります

森 重 香代子 山口

原稿用紙胸にいだかせ発たせたり柀埋めをらむあの世に夫は  
かなしかる音痴のわれに声あはせ唄ひくれにし夫のなつかし  
何某の心弾みのあるごとし明日は七夕と思ひしときに  
なにとなき懺れいだき迎へたる星祭りの夜もことなく終る  
日の暮れに娘より電話のあるまでは人語をわれの洩らすことなし

影山 一男 千葉

生ビールの泡のやうなる雲湧けり梅雨明け告ぐる蟬に覚むれば  
上半身雲に隠れしスカイツリー見つ越えたり朝の荒川  
白雲を黒雲じよよに侵しゆく空を仰げり三分ほどを  
東京の空よりきたる雨雲がこらへきれずにわが街濡らす  
晩年のここに飼はむ雲の峰うたに拠りつつ歌に生かされ

桑原 正紀 東京

中世の南蛮菓子磨かれてカステラとなりし歳月おもふ  
職人がきはめし比率(卵黄5卵白3)のカステラぞこれ  
金と茶の色目きはやかカステラを黒き漆の皿に載せれば  
わうごんの光たたふるカステラをほほばればこの世の福々し  
職人の(一歩先へ)のこだはりが辿り着きたる味を噛みしむ

狩野 一男 東京

駿河台 白門ありしところ今、地下鉄地上出入口なり  
先輩は法律学科三年で司法試験に合格せりき  
高齢者ふたりの夏の日曜日ひそと過ごせりあすの日のため  
東京に否々生きて半世紀東京人にはなれずに過ぎむ  
いろいろなことが分かるよ歩み来て夜の紫陽花眺めてゐると

宮里信輝 神奈川

宮ヶ瀬湖より流れ来る中津川 水は透明水量豊か  
水流はゆるくてゆたか鮎釣りの竿幾本も空でしなへり  
岸辺では幼子たちと親たちが水あそびせりゆるい流れで  
川原ではクルマとテントで数日のキャンプ楽しむ若いカップル  
さまざまなレジャーをゆるし上流で宮ヶ瀬湖を堰く「宮ヶ瀬ダム」よ

小島ゆかり 東京

へ看る友といはんこの日もHCU面会時間にすれちがふひと  
雨にぬれ汗にぬれつつ会ひに来ぬまどうつすらと眼ひらく母に  
傘さして雨ふる街に行きたしと母言ひき去年の梅雨入りのころ  
夜の雨きさら悲しわたしにも雨に濡れない日がやがて来る  
夕飯の箸をことんと置くやうに来るかもしれない母のさいごが

島田暉 神奈川

すこしづつ銃口こちらに向け直しテレビ画面よりわれを狙へり  
星空にひとり小舟を漕ぎゆけばまぼろしにたつ戦なき星  
空襲後近所の人ら焼けつくし焼けしオルガンやけに叩けり  
地球儀の裏は戦の続くらむ女子や子供の泣き声聞こゆ  
軍帽を被らされたる少年期今はコロナ禍とたたかふ老人

大松達知\* 東京

食べながらいくらだったか訊かれると思つていたら訊かれたうなぎ  
みずからをゴミと呼びつつほんとうにゴミと思つているのか娘  
しんしょくうんばんたいせきだなあ川島さん宛のはがきの川を書いてて  
人は言う、やることリスト書けと言う、書けば病むかもしれないと言う  
シマウマ対ワニの映像見ていたりシマウマがんばればくは人間

田宮朋子 新潟

草木のしげる六月くさむらに鬼灯のあをき実はずだちをり  
樹々たたき屋根をたたきて降る雨の濁音のなか家籠りする  
触觉にツと触れたればかたつむりツと引つ込めるあぢさゐの上  
梅雨晴れの土手に吹く風しろがねの白茅ちがやの千の穂の群れゆらす  
みどり濃き公孫樹の梢に夏宣言すること高く初蟬が鳴く

津金規雄 神奈川

教へ子にも時は流れて梅雨晴れの解語の花となりてたたずむ  
たちまちに花季過ぎて里山は青葉もりもり生命ひしめく  
庭土に影長く置くしやくやくの細かき揺れや夕光のなか  
モテ女だつた結婚まへの妣そこそこモテる子が追慕する  
散歩する犬に遭ふたび近寄られ困惑する妻 前世はワンちゃん

小山富紀子 京都

「うぐいすの鳴き声までは撮れないね」笑ひて弟がシャッターを押す  
お父さん今年も鉾が動くえとテレビの方へ遺影を向けぬ  
現知事は宵山生まれと聞きうれし生家その日の賑はひはや  
街路樹の子雀あわてて飛び出しぬ子供みこしの「ホイトーホイトー」に  
若き日は実感無き季語―暑に籠る―今年ほとほと実感しをり

清水正子 神奈川

星になつたフジコ・ヘミングのCDを聞きながら眠る…シヨパンはいいなあ  
末期癌からの生還ならざりし無名の彼もわが宇宙の星  
生者死者け寒くへだて梅雨のあめ地上銀河の街の灯に降る  
彼の死をアウフヘーベンしなくとも彼は生きてる家族うからの胸に  
父の日にプレゼントきぬジャカラランダの花の盛りに逝きし彼より

小嶋 一郎 佐賀

種無し葡萄喰ひつつ思ふなり何ががひとつ物足りないといと  
老体のカロリー摂取を考へて味噌汁に溶く卵のひとつ  
散歩するわれに付き合ふ雲ありてときに断れ間の日射しをば呉る  
里山へ続く細道この二年行くこともなし猪を見てより  
葬に来てこの三年の不義理託ぶ訳なく会はず過ぎたることを

福士りか 青森

多羅葉の暑中見舞ひが届きたり文字うすれつつ残る言の葉  
引き出しに父愛用の鉄筆あり多羅葉に文字を書くによからむ  
一生涯教師なるらむガリ版の道具を父は捨てられずをり  
歌一首したためるのがちやうどよし多羅葉の葉の細く長きは  
多羅葉に歌をさざまむ有明のひかり淋しきかんざしの尖

小島ゆかり 著書二冊

令和6年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

はるかなる虹

第十六歌集  
コスモス叢書第1236編

短歌研究社

令和6年8月刊 一八〇〇円(税別) 送料三〇〇円

サイレントニヤー

猫たちの歌物語  
コスモス叢書第1241編

短歌研究社

連絡先 〒112-0013 東京都文京区音羽一―一七―一四

音羽YKビル 短歌研究社

藤野 早苗 福岡

〔磁場発生〕表示灯赤くともりゐる夏真昼間の病廊しづか  
病室につづく廊下はリノリウム足音が背中に貼りついてくる  
それぞれの記憶の中に生きてゐる叔父なりわれには油谷志津夫なり  
還暦を過ぎて三十年生きるいま六十は壮年ならん  
七掛けで己の齢を換算し調子に乗つて肺炎になる

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう

コスモス叢書第1233編

六花書林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三―二四―一〇

マリノホームズ1A 六花書林

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別)送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む

コスモス叢書第1235編

柘書房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼一―二―一五〇六

斉藤梢歌集 令和6年7月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青葉の闇へ

コスモス叢書第1237編

柘書房

著者住所 〒982-0831 宮城県仙台市太白区八木山香澄町

二―一〇―一三〇六 薄葉様方

風間 博夫 千葉

世界保健機構認むる「確実な発癌因子」ピロリ菌とは  
「ピロリ菌Q&A」を熟読す監修浅香正博教授

スクリーンやうにべん毛回転をさせピロリ菌自在に動く  
内視鏡カメラ画像のわが胃壁爛るる箇所ただの朱色鮮やか  
感染のへりコバクター・ピロリ菌除菌をしたり服薬七日

田中 愛子 埼玉

「水槽」と思ひ「スイソウガクブ」に入りさかなクン今サクソフォン吹く  
駅頭で雨やりすこす時の間をふと愛しめりおとなりの人  
お位牌に礼してのちをゆつくりと語りぬ笑まふしやしんの母と  
里の家に今も残り捨てがたしと母が言ひるし祖母おばのきもの  
よみがへりまたよみがへり、よみがへらぬとある朝の寢屋の静もり

橘 芳 園 新潟

六条の刑場跡にゆかぬかと妻をさそへばすぐにこぼまる  
安楽ら処刑されたる六条の河原の草は枯れてなびけり  
春浅き流れが運ぶはや風に六条河原の州の草なびく  
斬首見て親鸞若く見上げしや六条河原の春浅き空  
かよひたる書肆みな消えし河原町ペット屋三店ありてにぎはふ

水上 比呂美 東京

戸があれば開けたくなくなつて穴があればもぐりたくなる一歳の坊や  
むすめのことボスと思つてゐるらしい背中にはまり毛づくろひする子  
全くサ、恋愛結婚みたいだねヒロくんのほつぺ爪つたりして  
むすめの子よだれまみれのよだれどりととうとうたたりたりらたり  
みどり児が眠りてゐたるけはひせり大きな桃が十二在る部屋

原 賀 環 子 東京

男をころは独りが単位、老いらくに『厄除け詩集』よみかへすとき  
くり返し読む詩ありけり「よしの屋で」「われら」「独り酒をのむ」詩  
「懐君を」「健ち恋し」で読む漢詩 鱒二の筆の超訳すこし  
フィクションと気づかぬ読者多いとか小説「へんろう宿」のリアルに  
質問 井伏鱒二様『へんろう宿』はほんとにフィクション？

大野 英子 福岡

畦道も田んぼもみどり若苗に伸びよ伸びよと吹く青葉風  
国道沿ひの広告塔は白ばかり広告募集の文字が添へられ  
人混みのなかはとつてもさびしくてまた来てしまふ埠頭とつたん  
前世は大罪人か炎天下のアスファルトの上でのたうつ蚯蚓  
蒸し暑き夏ですみどりのいほいほを刻み炒めるゴーヤチャンプル

松 尾 祥子 東京

「ありがとう」くりかへし言ひすこしづつ母は食みゆくいのちだあらへ命俵を  
ざんざんと七月の雨ふるゆふべ高校時代の友に会ひにゆく  
十七の娘にもどりかしましく友と分け合ふ大きオムレツ  
夢見たる未来は消えて二の腕の逞しくわれら前期高齢者  
双葉出て日ごと緑の濃くなりぬ我のあさがほ孫のあさがほ

鈴木 千登世 山口

読みかけの本飲みかけの缶コーヒー（かけ）の散らばる夫の机  
一時間かけて行きしに面会は五分 五分を抱へて帰る  
食べる人をらねば氣力満ちて来ず煮付け酔の物並ぶを買ひぬ  
二時間後線状降水帯覆ふわが街このごろ予報は当たる  
予後の夫支ふる術を探りつつ驟雨の銀のつぶて見てをり

小島 なお\* 東京

県境またいで手紙出しにゆく五指それぞれが光源となる  
フリーペーパーの信濃の湖にカヌー、いつかの涙あおむき  
のど飴の散らばる床を踏む裸足あつけない夏の落ち葉のみどり  
鼻腔には雨のなごりの粉葉舞いあがるには足りないひかり  
トンネルの中で取りこぼした声は雲の集まる川下に照る

小田部 雅子 静岡

納豆菌食べてアオムシアブラムシ下痢して墜ちる、とヒトは噂す  
納豆菌のおかげうどんこ病が来ず坊ちやん南瓜むりむり育つ  
ぬるま湯+納豆砂糖少々+たつぷり一夜||納豆菌増ゆ  
エアコンに芯まで冷ゆる夏の午後シヨパンが好みシヨコラシヨ一飲む  
三十七歳突然音楽家を辞めて食に走りシジョアッキーノ・ロッシーニ

うたを味わう―食べ物の歌 ●高野公彦

十月の味 ― 椎茸の食べ方いろいろ―

椎茸がわらわらはえてゐる所この辺り  
からこの山笑ふ 河野 裕子

秋といえば茸である。茸といえば、代表的なものは松茸、椎茸であろう。ほかに湿地もあり、舞茸や滑子(稷茸)や初茸などもある。岐阜県中津川市に住む私の友人は、茸取りが好きで、秋になると血が騒ぐという。車で隣の長野県の本曾方面へ出かけ、その辺の山に入り、思う存分茸を取るそうだ。

松茸は、さっと焼いて醤油をつけて食べ

る。香りと、はりはりした食感がいい。だが、普通に出回っている安物の松茸は土臭くて駄目である。どびん蒸して香りを楽しむのが無難なところか。

椎茸は、香りよりも味である。生ま椎茸、干し椎茸、どちらもうまい。生まで新鮮なものなら、焼いて醤油をつけて食べてもいい。普通は煮付け、天ぷら、油炒めなどで食べる。日本料理に向いているが、中華料理にもよく入っている。味がよく、調理法も多彩、というのが椎茸のいいところである。松茸がお上品な貴婦人だとすれば、椎茸は働き者の奥さん、といえるかもしれ

ない。

筍が竹の子であるように茸は木の子である。椎茸は、椎・樅・榎・檜などの倒木に発生するのだそうだ。しかし、それだけでは多数の人間の胃袋を満たすことはできないから、人工的に栽培する。よく使われるのは樅だ。樅の幹を適当な長さに切って、椎茸の菌を打ち込む。これを榎木(はたき)という。伊豆を旅行した時、山間のうすぐらい林の中に榎木が整然と並んでいるのを見かけたことがある。

右に挙げた歌は、どこの山だろう。「この山笑ふ」といつているから、もしかすると栽培ではなく、倒木に椎茸が生えているような山かもしれない。